

定有堂のウォルデン池

(音信不通) ①

奈良 敏行



定有堂書店は、鳥取駅と県庁をむすぶ商店街の中ほどにある。駅から約七百メートル。若桜橋を渡ってすぐの北詰めにある。店前の往来を若桜街道といい、十字に交わる小さな流れを袋川という。

袋川は蛇行しながら二キロほど土手に桜並木をつづける。桜は北側にのみ連なり、対岸にはみられない。桜の下には手入れの行き届いた小道がのびる。

本屋は北側、この小道側にあるので、ときおりたたずむのも、北の土手の上だけ。

最近になって橋を中心とした袋川に興味がわいてきた。橋のにぎわいが少なくなってきたことも関わりがあるか

もしれない。橋が道路の一部と思われるのが、人通りがまばらになり、道というよりは造形物、とその個性に気がつきはじめたせいだ。

最初のきっかけは、町医者というには著名すぎるけど、地域の人にとっては身近に大切な人なので、そういう他に適切な言葉をしらないが、その徳永医師が、桜の満開の夜に、本屋に駆け込んだことがあった。

「奈良さん、ちょっとおいで」と、入り口のドアから顔をのぞかせ、私に手招きする。「一人で店番してるんですけど」と言っただけ、お客も途絶えていたし、ついて行った。

橋の上は誰もいなかった。「ほら、川面を見て」「なんですか、もう暗いですけど」。「ぼんぼりの灯りが桜を照らし出し、それが水面に映ってるでしょう」「あ、ほんと、ですね」確かに鏡のように川面に桜がみえる。

「で、ずっと、こっち、反対の岸の道路に行ってみよう」と誘われ、急いだ。

桜並木が逆さになって、そのまま川に存在している。桜は川向うから見るときれいな遠景なんだ、と知った。そのようにかみしめて街を味わう人がいることも知った。

もう一つ。本屋には「読む会」をはじめ、いくつかのサークルがある。案内の掲示や会員への毎月の案内ハガキを

作成してくれる、本屋の常連の人がいる。ドラメリアさんという名で知られる。この人がいないというんなサークルが回らないのだが、案内を出したりはするのだが、読書会そのものに熱心に参加するわけではない。年納めの会に招かれ黙ってウナギを食べるくらいだ。いるけどあまり姿をみない。座敷わらしのような存在だ。守護神のひとりである。一人というと他にも神がいるのか、ということになるが、…いる。ネコである。本や雑誌の特集、置物がいっぱい。猫が好きな人のための本屋なのだ。猫が好きな人は本が好き、と決めつけて久しい。

このドラメリアさんが、土曜の昼過ぎに来て、よくぼやいている。かなりイライラしているみたいだ。「また、森の生活者のベージュが買えなかった」と。私はこのベージュというのがいまひとつイメージできなかった。

川のほとりにシティホテルがあつて、宿泊客の人がよく本屋に立ち寄ってくれる。あるオジサンぽい人が、「奈良から出張でときどきくるんだけど、あのベージュが楽しみでね」と語りかけることもあつた。男女、年齢も問わないのか、ベージュは？

勇気を出して、「森の生活者」に行った。ベージュカフェなのだ。「ベージュ！」と陳列ケースをみたが、売り切れだった。窓際のカウンターに座つた。本屋の入口が正面

に見えた。正面にみるから正面なのだと後で気づいたが、じつに人の出入りがよく見える。「クラシック」という名のコーヒーを注文した。おいしかった。（現在は「ワイルド」が気に入っている）

「森の生活者」は二階にある。袋川が道をはきんで流れているのだが、カウンターからはすぐ下にあるように感じる。左に若桜橋、右は窓枠で視界が切れる。川の左右が閉じられたようにみえる。

これを「池」と呼んではいけないのだろうか。私は水の側、池の周囲が好きなのだ。

本屋にはいくつかのコーナーがあるが、奥にさりげなく置いてある「ヘンリー・ソロー」の本がよく売れる。自分では、生き方のオルタナティブというものの「窓」として置いている。『孤独の愉しみ方』や『森の生活』がよく売れる。前者は副題に「森の生活者ソローの叡智」と記してある。ソローとベージュカフェ「森の生活者」は関係あるのだろうか？

オルタナティブ、世界の中心に隔たりをおいた、そうでもないもう一つのもの、という立ち位置は、定有堂の核となるものだ。すき間に咲く、ということでもある。

池が好きだ、といったけど、「森の生活者」から見た袋川の一角は、「池」だと思つた。一つのアイデア（思い

つき)かここに点火する。そういう瞬間が好きだ。この思いつきは、ソーローが過こした「ウォルデン池」へと飛び火する。

二階の窓際のカウンターから見た袋川の一角が池に見えない？と何人かに問いかけてみた。みんな「見えない」とつれない。でも、ちよつと待って、考えてみる、と『森の生活』を買っていつてくれた人がいる。結川さんだ。出張先の米子のホテルで読んでみると言ってくれた。もし、数日後、彼が、「見える、ウォルデン池だ」と応えてくれたら、何かがはじまるかもしれない。彼も、この「池」の側に職場がある人間だ。

長い間、若桜橋の北詰を根拠地にし、街の中に生きてきた。橋の下に流れる袋川は、北側中心に偏った保存のほどこされた土手だ。言い伝えによると、武家の時代、北側の土手を高く、大雨のときは、南側に水があふれるように高低差が工夫されていた、と聞く。

いままでは、こちら側で並木道のたたずまいを楽しんでいた。桜のトンネルという風情をよろこんでいた。でも反対から見ると、少し森の「も」の字が感じられる。

思いつきが、ここに火を点す。現実は何ももう変わらない。「見立て」は、でも心象風景を一変させることもある。

(参考)

ソーロー 『孤独の愉しみ方』 イースト・プレス 2010